

付録A 付録

A・1 ちばあきお小論

―人間を見つめる温かいまなざし―

漫画評論家 はせひろとし

漫画が市民権を得た、というような話を聞く。いったいどういう意味なのか。かつて「漫画ばかり読んでいないで、少しは勉強しなさい」と、親から叱責しっせきを受けたものだが、現代の膨大な漫画の前に、親が言葉を失ったのか、漫画で育った世代が親になって、黙認している状況なのか。役所がガイドブックなどに漫画をとり入れたとか、ウケをねらったのかお調子もの大学が、入試問題に漫画を用いるまでになった社会現象を言うのか。つまらぬことだ。市民権という意味不明なものを持つまいが、漫画は漫画として厳然げんぜんとあるのだ。かつて小説や映画・演劇で、こんなバカな意見をいう者がいたか。

現代児童漫画の発展が、手塚治虫の工夫に始まったのは誰しも認めるところだろう。ディズニの影響と考える西洋的な絵柄と、ヒューマニズムをテーマとし、それまでの平面的な構図から、映画的手法を用い立体的な構図をとり入れたことは革命的であった。そして、常に漫画界をリードしつづけたエンルギーは、驚くべきものだ。氏の漫画雑誌を丹念に読み、有望と思える若い漫画家に注目し、ライバル意識を燃やし、第一線に居ようとした執念は、鬼気迫るものがある。おそらく氏の漫画職人のような人は、市民権云々をいつているヒマがあれば、漫画の一頁でも埋めていただろう。

少し脇道にそれるが、加藤芳郎がある週刊誌で、少年漫画（誌）を、汚くて読むに耐えない旨の発言をしていたが、最近の少年漫画がどんなものであるかを検証することなく、ザツと目を通した印象で、氏の知っている漫画との比較の上での、感じを述べただけだろう。氏にとつては、少年漫画は汚いという印象が先立ち、検証などする必要も感じなかったのだと思う。それはそれでいい。であれば、仰々しく週刊誌などで少年漫画のことなどいう必要などなかったのではないか。同じ少年漫画の手塚治虫の作品を、氏はどうとらえたのだろう。やはり汚い漫画というのだろうか。テレビのCMでしか存じ上げぬが、氏の飄々ひょうひょうとした人柄と、漫画の面白さは万人に愛されるものだろう。だからこそ、その氏からとは思えぬ発言は残念に思えた。

とまれ、ただ漫画を漫画として、ひたすら描いた職人的漫画家の一人に、ちばあきおがいる。漫画家ちばあきおの誕生は、人気漫画家ちばてつやの弟として育った影響のもとにあったといえ、それは宿命であった。てつや氏の連載が少女漫画で始まったせいも、あきお氏のデビュー作も少女漫画であった。昭和42年頃で氏が24歳の時である。てつや氏の少女漫画の新しさを感じるのは、当時吉屋信子¹流の少女漫画が多いなか、氏の作品の底流には社会性（リアリズム）があったことである。ここで注目したいのは、一方あきお氏の少女漫画に脈打つものは、人間

¹ 吉屋信子（1896年1月12日生）は大正・昭和に活躍した日本の小説家である。新潟県生まれ。栃木県で少女時

性（ヒューマニズム）が色濃く反映していることなのだ。大きくとらえると、この差異は、その後の二人の差異として表れる。勿論、ドラマ作りにおいて、社会性人間性というのは切り離せないもので、どちらかの作品に例えば人間性が全く欠如（けつじょ）しているということではない。ちばてつやについては、機会があれば書いてみたい、今はその任ではない。

昭和44年、てつや氏の仕事の比重が少年漫画に移る頃、あきお氏も少女漫画から少年漫画へと移行する。この時期の氏の作品の基調をなすのは、互の価値観の相違からくる自己発見だ。この傾向の作品で、最も完成度が高いのは、昭和47年に発表した『みちくさ』²である。勉強嫌いで、メンコなどで遊んでばかりいる少年と、成績優秀な少年が地下室にとじこめられる。一人は遊びの楽しさを語り一人は勉強の大切さを語るが、このまま助からないという状況を知って、二人の思いは、勉強しておけば良かった、もつと遊んでおけば良かったと、お互いの生活を羨（うらや）ましく思い、もし助かったら、絶対そうしようという処で氏はもう一転させ、二人が助かる状況を作る。そして二人に、今の決意はどこへやら、外へ出たら思いっきり遊ぶんだ、早く帰って勉強勉強、といわせて終わらせる。二人は元の価値観の世界に戻ることになるが、お互いの自己発見の事件は、おそらく将来二人の生き方に影響するだろう。

昭和42年から45年の4年間、氏は少女漫画少年漫画の短編10数本かいたのち、¹⁰⁰頁の長編『校舎つらのイレブン』³を発表する。他の部から、やっかい者扱いされているサッカー部を、新しく赴任してきた若い教師が、一時は彼らの不真面目にみえる練習態度に腹を立てるが、彼らの本心を知り共に練習に励む。地区大会が始まり、前回の優勝校との対戦になる。結果は負けるのだが、これまでにみられなかった真剣な戦いぶりに、やっかい者扱いしていた他の運動部のみんなも、惜しまぬ拍手を贈るといのがストーリーだ。いっちなまえば、努力が報われるという単純な話なのだが、氏のフリーハンドのあたたかいペンタッチと、人間を洞察するやさしい視点からの人間群像は、単純な話、で片付くほど甘くはない。手塚治虫のヒューマニズムが、その絵とあいまって、ハイカラな感じがするのに対し、ちばあきおのそれはいかにも人間くさい。おそらく、氏の満州からの引き揚げ、そして決して裕福ではなかったと思える、下町での少年時代の生活が、影響しているとみるのは、ほぼまちがいないだろう。

ともかくこの作品は、ちばあきおのスタイルを決定づけた、エポック的作品である。

このあとつづいて、¹⁰⁸頁の少年草野球漫画『半ちゃん』⁴を完成させる。下手だが野球が大好きな半ちゃんが、野球チーム募集の貼紙を貼ってまわるところから、この物語は始まる。集まってきた少年達も、野球はそれほど上手くない。隣のチームからの誘いで試合をするが、勝負にならぬほど簡単に負けてしまう。強くなりたいなアと思っている処に野球の上手いイガラシがくる。彼は隣町チームとの再試合を申し込み、チームの創立者ではあるが、一番下手な半ちゃんを降ろし、彼一人の活躍で試合に勝つ。イガラシの独善的ともいえるやり方に、みんなは反感を抱くが彼の実力の前に、野球の下手な彼らは何もいえない。イガラシの指導のもと、練習がつづく。半ちゃんはすでにレギュラーをはずされ雑用係になっている。だが、彼は不満を抱

代を過ごす。栃木高等女学校（現栃木女子高校）卒業後作家を志し、¹⁹¹⁶年（大正5年）から「少女画報」誌に連載した『花物語』で人気作家となる。その後、大人向けの小説に転じ、¹⁹⁵²年には『安宅家の人々』『鬼火』で第四回日本女流文学者賞を受賞。文学界に広く認められる。晩年は「徳川の夫人たち」「女人平家」など女性史を題材とした長編時代小説を執筆した。

² 「別冊少年サンデー」（小学館）¹⁹⁷²年（昭和47年）1月号掲載

³ 「別冊少年ジャンプ」（集英社）¹⁹⁷¹年（昭和46年）2月号掲載

⁴ 「別冊少年ジャンプ」（集英社）¹⁹⁷¹年（昭和46年）9月号掲載

かない。みんなが野球をやっているだけで満足なのだ。毎日つづく本格的練習に、みんなは嫌気がさし、下手でもいいから以前の楽しい野球の方が良かったといい出し、チームワークは乱れ解散する。ちばあきおは、それぞれの状況における人間の心理を、丹念にかきこんでいく。

数日後、またチーム募集の貼紙を貼る半ちゃんの姿がみられ、そろそろみんなくる頃なんだけどなあ……と、空地で一人つぶやくシーンで終わる。一見バカとも思える半ちゃんの人の好きに、ちばあきおは惜しめない愛情を捧ぐ。

ちばてつやは『阿Q正伝⁵』を読み、あきおにも勧めたという。先にも述べたし、単純な比較の上でのことだが、てつや氏は『阿Q』から社会性を読みとり、あきお氏は、より人間像に興味を抱いたように思える。そう推測すると、この作品には『阿Q』の影響がうかがえるのだがどうだろう。

昭和47年、ちばあきおは初めての連載漫画を開始する。大人気を博した中学野球漫画『キャプテン』である。(1年後、並行して『キャプテン』の主人公を高校に入れ、甲子園を目指す『プレイボール』も始めた)この作品は、戦後のスポーツ漫画の流れの中にあり、寺田ヒロオ⁶作品と比較された小文を読んだ記憶があるが、それは当時スポ根ものと称しスポーツは根性だ、という漫画(世間がいっただけで、作者はそう思っていないはずだ)が多く出て、その対極の位置にあった寺田作品と共に、さわやかさに相似点があるというものであった。寺田作品と較べ『キャプテン』の人間模写はもっと複雑で、それは時代の流れのせいかも知れない。

また『キャプテン』も根性漫画といえなくもないが、ただそれは、ガラガラした根性漫画ではなく、どこにでもいるような少年が、工夫を重ね成長していくという過程を、愛情を持って描く氏独自の語り口(コマ割り)は——上手い小説は、行間からも文章が伝わってくるといわれることがあるが、氏のコマ割りにと同じことがいえる——根性というような陳腐^{ちんぷ}な言葉を消し去ってしまう。氏には、あるがままの人間を愛することしか、考えられぬのだ。

『キャプテン』『プレイボール』の連載終了後、3年ほど休養をとり、昭和57年『ふしぎトロボくん』を連載する。

氏の内部にどんな劇が生じたのかは謎だがこれまで氏の描く主人公たちは、いかにも我々の周りにいそうな人間だったのに、この作品の主人公トロボは超能力者なのだ。動物と話すことが出来るのは勿論、大地と話が出来る人の心が読め、UFOを呼び宇宙人と友だちになる。ただトロボは、特に超能力を意識していない。非常に内向的な少年で、人間とのつきあいより、動物の方が気楽につきあえるのだ。

学校に入り、友だちも出来、トロボの心は次第に開いていくのだが、最初は珍しがられていた超能力も、心の中を読まれることでパニックになる。友だちはまたトロボをさけるようになり、学校を去ることになる。

この作品は、トロボの人間性を追うより、氏のやさしくみつめる人間洞察にうつろったエスプリの効いた話を楽しめればいいと思う。連載時の人気は芳しくなかったと聞くが、もっと評価されている作品だと思う。

この作品のあと一転して氏は、これまでのテーマに戻り『キャプテン』のボクシング編ともいえる『チャンプ』を連載するのだが未完で絶筆となった。

⁵ 魯迅の短編小説。1921年作。阿Qはこの小説の主人公。かれはいかに虐^{しいた}げられても、つねに勝利者と考えて自己満足し、ついにこのため死刑に処せられた。魯迅は阿Qの精神を当時の中国人の奴隷根性の典型として描いた。(山川出版社 世界史小辞典)

⁶ 本名 寺田博雄 昭和6年8月4日生 漫画家。代表作に『背番号0』『スポーツマン金太郎』がある。第一回講談社児童漫画賞を『スポーツマン金太郎』で受賞。

⁷ ありふれていて、古くさくつまらないこと。

ドラマは人間心理の葛藤劇に他ならない。ちばあきおは少年の何気ない言動に、細心の注意を払う。一見無邪気に見える少年たちの心の葛藤を、氏はさりげなく描く。このさりげなく描くということが、いかに困難なことか。これは非常なテクニクを必要とすると思うのだが、氏の天性のものがそれを感じさせない。おそらくその根源にあるのは、氏のヒューマニズムであり、究極ちばあきおは、人間が好きなのだ。氏の目には、下町で遊んだ少年の日が、いつも映っていたにちがいない。

10年経ても古さを感じさせぬ作品群は、人間をみる氏のあたたかいまなざしがあるからで、氏が少年漫画に残した足跡はいつまでも残るだろう。近々、氏の全作品集⁸が出ると聞く。喜ばしいことだ。楽しみに待ちたい。

（付記）ちばあきおの作品群は、弟樹之氏との共同作業のものも多いと聞く。ここではちばあきお作品として統一させていた。御了承願いたい。

（「ちばあきおのすべて」―「キャプテン」から「チャンプ」までの軌跡―
1994年9月24日発行、ホーム社出版より）

A・2 ちばあきお年表

西暦(昭和)	出来事	作品タイトル
1943年(昭和18年)	1月29日満州・奉天(現在の中国・遼寧省瀋陽)で千葉家の三男として誕生。 本名：千葉亜喜生。	
1946年(昭和21年)	6月、引き揚げがはじまり、奉天を出発。 7月、九州博多に到着。父の郷里、千葉県飯岡に落ち着く。	
1947年(昭和22年)	8月、東京・小梅町(現在の墨田区向島二丁目)に父が家を新築。	
1949年(昭和24年)	墨田区立小梅小学校入学。	
1955年(昭和30年)	墨田区立墨田中学校に入学。	
1957年(昭和32年)	江東区深川永代二丁目に引越す。	
1958年(昭和33年)	墨田区千歳町に引越す。 4月、昼間はおもちゃ工場に勤めながら都立墨田工業高校夜間部に入学。 入学して間もなく、からだをこわし自宅療養する。 回復後は兄・てつや氏の漫画の手伝いをする。	絵物語『ポテンコ先生』 『リカちゃん』 『サブとチビ』 『それ行け、クミちゃん』 『すてきな少女 マイ・オケイ』 『あかねちゃんとさくらちゃん』 『ピーター三世』 『お兄ちゃん』 『気になるあの子』 『へんてこふたり』 『犬と少年』
1962年(昭和37年)	練馬区富士見台に引越す。	
1967年(昭和42年)	『サブとチビ』で漫画家デビュー。	
1968年(昭和43年)	3月、結婚。妻、文江。 12月、初の海外旅行ヨーロッパへ。	
1969年(昭和44年)		
1970年(昭和45年)		
1971年(昭和46年)		『ニタリくん』 『いつてきまゝ』 『ノンにおまかせ』 『愛の惨歌』 『フーちゃん』
1972年(昭和47年)		『ちよっきんちよっきんちよっきんちよっきんちよ』 『校舎うらのイレブン』 『半ちゃん』 『みちくさ』 『キャプテン』
1973年(昭和48年)	5月、長女誕生。	『がんばらなくっちゃ』 『プレイボール』
1974年(昭和49年)	初単行本『キャプテン』発売。	『モウちゃんは強かった!』

西暦(昭和)	出来事	作品タイトル
1975年(昭和50年)	8月、長男誕生。	
1977年(昭和52年)	第22回小学館漫画賞を『キャプテン』『プレイボール』で受賞。	『モウちゃんがんばった』『磯ガラス』
1978年(昭和53年)		『プレイボール』完結
1979年(昭和54年)		『キャプテン』完結
1980年(昭和55年)		4月スーパーアニメスペシャル『キャプテン―白球にかける! ぼくらの青春―』 8月水曜ロードショー『キャプテン―熱闘再び! 墨谷対青葉―』
1981年(昭和56年)	9月、兄・てつや氏、赤塚不二夫氏、北見けんいち氏ら漫画家仲間とともに出生地である満州(現在の中国東北部)を訪れるツアーに参加する。	劇場版『キャプテン』(日本ヘラルド映画)
1982年(昭和57年)		『ふしぎトロボくん』『パパ』
1983年(昭和58年)		テレビアニメ版『キャプテン』 (1月10日〜7月4日)全26回
1984年(昭和59年)	9月13日没。享年41歳。	『チャンプ』
西暦(昭和)	出来事	
1985年(昭和60年)	第一回東京国際映画祭(6月1日)で劇場版『キャプテン』上映	
1986年(昭和61年)	ジャンプコミックススペシャル『キャプテン』(集英社)刊行全15巻	
西暦(平成)	出来事	
1989年(平成元年)	愛蔵版『プレイボール』(集英社)刊行全11巻	
1991年(平成3年)	愛蔵版『キャプテン』(ホーム社)刊行全15巻	
1994年(平成6年)	ちばあきお名作集(ホーム社)刊行全10巻	
1995年(平成7年)	文庫版『キャプテン』(集英社)刊行全15巻	
1996年(平成8年)	文庫版『プレイボール』(集英社)刊行全11巻	
1999年(平成11年)	文庫版『ふしぎトロボくん』(集英社)刊行全4巻	
2002年(平成14年)	月刊コミック特盛『キャプテン』(ホーム社)刊行	
2004年(平成16年)	文庫版『チャンプ』(ホーム社)刊行全2巻 月刊コミック特盛『プレイボール』(ホーム社)刊行	
2005年(平成17年)	テレビアニメ版『プレイボール』 REMIX『キャプテン』(ホーム社)刊行	
2006年(平成18年)	テレビアニメ版『プレイボール』 ^{2nd}	

A・3 あとがき

1997年にキャプテン谷口君の場面を文にしてからもう9年の歳月が経ってしまった。そうしている間に20世紀から21世紀に変わって世の中の流れがかなり速くなってきた気がするこの頃だ。原作者ちばあきおさんが亡くなってから多分だんだんとその作品は忘れられていってしまうと感じた人は少なくないであろう。しかしこの頃の状況はどうであろうか。『プレイボール』のアニメ化、新しい単行本（Remix）の発行と新しい世代の中にもちばあきお作品を指示する人が多いという現れであろう。

なにげなく作ったキャプテン谷口君編を読んでいる子ども達が目の前にいる。その子ども達の「続きはないの？」の純真な一言がこの丸井編をまとめる気にさせてくれた。大人から言われても動かない自分が子ども達から言われると動いてしまう。自分には気がつかないパワーがそこにはあるのだろう。

空想の世界に子どもを引き込んでイメージションをふくらませる物語はそれでいい。しかし現代はもっと、もっと現実生活の向上に目を向けさせるものをもっとたくさんあってもいいんじゃないか。中高校生における部活動は人間形成において大切な働きをしていることは誰もが認めることである。顧問の先生との出会いが部活動を決めるといわれるが、墨谷二中のようにキャプテンを中心に活動することが究極の目標ではないか。青葉学院の部長先生は現代においての教師の姿を現しているといつてよい。では墨谷二中の顧問の先生はどこにいるのだろう。マンガにはでてこないがベンチに入れなかった70余名の部員とともに観客席で応援をしているに違いない。11名の部員につくよりは多数の方の指導を優先する先生なのである。それはある意味で当然のことである。谷口君の高校編『プレイボール』では野球部の顧問の先生が勉強面での指導で登場する。原作者ちばあきおが墨谷二中の顧問の先生を意識しなかったわけではないということがここからわかる。登場しない顧問の後を追いかけてみる。ある意味でその行動、立場は生徒と部活動顧問の関係として理想の姿かも知れない。そういえば競技は違うがラクビーの監督は試合中観客席にいるなあ。

文にまとまりがなくなってきたが、最後にこの丸井編をなぜか作らせるきっかけを作ってくれた一年一組の生徒達にお礼をいいたい。

「ありがとう！」

君たちの小澤という人間を動かしたパワーは、きつともっともっと大きくなって今度は自分自身に返ってくるはずです。

2006年1月18日

文 小澤茂昌